日本史Ａ，日本史Ｂ

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

日　本　史　Ａ

１　前　　文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は，大学（専門職大学，短期大学，専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に，高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ。）の段階における基礎的な学習の程度を判定し，大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており，この目的自体は，従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方，共通テストでは，平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ，知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。日本史の問題作成方針にも，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

ここでは，本年度の問題について以下の視点から分析し，上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- 問題内容・範囲は適切であったか。
- 問題の文量・程度は適切であったか。
- 問題の表現・形式は適切であったか

２　内　容・範　囲

第１問　博物館を訪れた高校生二人の会話を基に，幕末期から昭和戦前期における，政治・外交史から社会・経済史，文化史のあらゆる分野について問う問題。二人が館内で接した３点の史料を中心に小問が構成され，図版や地図を用いた出題もみられた。

問１　幕末期の社会について述べた二つの文の正誤の組合せを判断する問題。ペリー来航時の様子を記した日記を基に，史料内容の読解と同時期の政治・外交史に関わる理解及び表現力が求められる。

問２　近代の人々の暮らしについて述べた四つの文を読み，時期的な誤文を選択する問題。明治初期の習慣や生活様式に関わる理解が求められる。

問３　日露戦争について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。戦時中の国内における社会的風潮と，戦後の外交史に関わる理解が求められる。

問４　近代の社会情勢について述べた四つの文を読み，時期的な正文を選択する問題。日露戦争後の社会に関わる内容を判別する知識及び思考力が求められる。

問５　昭和戦前期における日本の国連脱退を報じた二つの新聞記事に関して述べた四つの文を読み，二つの正文の組合せを選択する問題。史料の内容を正確に読解する力及び表現力が求められる。

問６　第一次世界大戦後の国際条約調印について述べた三つの文を読み，古いものから年代順に配列する問題。同時期の日本外交の流れを，海軍軍縮・国際協調という世界的な潮流の中で考察する力が求められる。

問７　東アジアの地図を用いて，満州事変前後の歴史的事件が起こった位置を問う問題。日清・日露戦争以後の日本の大陸政策の流れの中で各事件を理解し思考･判断する力が求められる。

第２問　井上馨・渋沢栄一の足跡と二人の関わりについてまとめた年表をもとに，幕末期から明治後期の政治・外交史及び社会・経済史について問う問題。当時の新聞を史料として用いた出題もみられた。

問１　幕末期の外交に関わる三つの文を読み，古いものから年代順に配列する問題。経済史を含む理解及び歴史的思考力のほか，「攘夷」の意味を史料から読み解く力も求められる。

問２　明治初期の財政について述べた二つの文を読み，それぞれと関わりの深い事項の組合せを問う問題。この時期に関わる基本的な知識のほか，経済政策の意図や目的に関わる思考力・判断力が求められる。

問３　明治末期の製糸･紡績業について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを選択する問題。産業革命期に両産業が果たした役割についての思考力・判断力が求められる。

問４　明治後期の新聞記事について述べた四つの文を読み，二つの正文の組合せを選択する問題。史料内容の読解とともに，当時の内閣制度に関わる理解及び表現力を問う問題。

第３問　高校生が訪れた近所の歴史資料館に展示されていた史料を基に，明治期を中心として近現代全般にわたる政治史，社会史及び文化史について問う問題。

問１　明治期の私擬憲法について述べた四つの文を読み，二つの正文の組合せを選択する問題。私擬憲法の性格に関わる理解と，史料内容を読解する力が求められる。

問２　明治期の政治・社会運動について述べた四文を読み，時期的な誤文を選択する問題。自由民権運動の変遷や歴史的意義についての理解が求められる。

問３　大日本帝国憲法の制定過程について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。同憲法の制定過程についての理解が求められる。

問４　大日本帝国憲法について述べた四つの文を読み，二つの正文の組合せを選択する問題。同憲法と日本国憲法のそれぞれの特質についての理解と，史料内容の読解する力及び表現力が求められる。

問５　19世紀の感染症と医学について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。幕末期及び明治期の社会史・文化史についての理解が求められる。

問６　明治期の文化人の業績について述べた二つの文を読み，それぞれに該当する事項の組合せを選択する問題。この時期の文学史に関わる基本的な知識が求められる。

問７　第二次世界大戦後の社会について述べた三つの文を読み，古いものから年代順に配列する問題。昭和中期から平成期にかけての環境問題及び社会運動に関わる理解及び思考力が求められる。

第４問　近現代の食文化･食生活について述べた文章をもとに，幕末期から昭和戦後期における，政治・外交史から社会・経済史，文化史の全般にわたって問う問題。表の読解及びデータの解析を主眼とした出題もみられた。

問１　幕末期から明治中期にかけての食に関して述べた四つの文を読み，正文を選択する問題。同時期の政治・外交史から社会・経済史，文化史の全般にわたる理解が求められる。

問２　第二次世界大戦後における食料消費量の変遷を示した表を読み，空欄に該当するデータの組合せを選択する問題。解説文を基に資料を読解・分析する力が求められる。

問３　20世紀前半の日本と東アジアの人々の移動に関して述べた三つの文を読み，古いものから年代順に配列する問題。明治末期から昭和戦前期にかけての政治・外交史を，国際環境の中で考察する力が求められる。

問４　明治期から昭和戦前期にかけての都市や農村の人々の生活について述べた四つの文を読み，内容上の誤文を選択する問題。明治期から昭和戦前期の社会・経済史に関わる理解及び思考力・判断力が求められる。

問５　大正期の米の関税をめぐる議論について述べた二つの文を読み，その理由として正しい文の組合せを選択する問題。近代の経済政策について，その背景を含めた思考力・判断力・表現力が求められる。

問６　昭和戦時期の食について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。同時期の人々の生活の様相について社会的背景の中で思考力・判断力が求められる。

問７　第二次世界大戦後の社会について述べた二つの文を読み，それぞれに該当する事項の組合せを選択する問題。占領期の政治・外交史及び社会・経済史に関わる理解及び思考力・判断力が求められる。

第５問　ある学校の近現代史の授業において，人の移動と住環境の変遷について生徒が発表した内容を基に，20世紀以降の現代史全般について問う問題。地図と表を組み合わせて資料活用の技能を問う出題もみられた。

問１　大正期及び昭和戦時期の社会について述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。各時期の社会の様相についての理解及び思考力・判断力が求められる。

問２　昭和中・後期の社会について述べた四つの文の中から，時期的な正文を選択する問題。1960年代（高度経済成長期）の社会の様相を経済的視点から読み解く力が求められる。

問３　20世紀の社会について述べた四つの文を読み，時期的な誤文を判断する問題。大正期から昭和中期の世相についての理解が求められる。

問４　昭和中・後期の外交及び社会について述べた三つの文を読み，古いものから年代順に配列する問題。第二次世界大戦後の日米外交が社会に与えた影響についての総合的な思考力・判断力が求められる。

問５　第二次世界大戦以後の米軍基地の存在が地域社会に与えた影響について述べた二つの文を読み，正文の組合せを選択する問題。同一地点における年代の異なる地図を比較し，関連する表の内容を正確に読解する力及び表現力が求められる。

問６　第二次世界大戦後の住宅難に関して述べた二つの文を読み，正誤の組合せを判断する問題。当時の人々の暮らしを歴史的・社会的背景の中で思考力・判断力が求められる。

問７　昭和中期の人々の住まいと暮らしについて述べた四つの文を読み，時期的な誤文を判断する問題。高度経済成長の光と影に関わる知識と，資料を正確に読解する技能が求められる。

３　分　量・程　度

⑴　分量

問題数は大問が５題，小問が32問であった。60分の試験時間を考慮すると，大問，小問の数は適切である。ページ数は27ページであり（共通テスト⑴も同様に27ページ），問題に関する情報量とあわせて，分量に関しては適当であった。ただ，共通テスト⑴の出題においては，家系図，グラフ，図版，史料と多様な媒体が用いられたのに比して，共通テスト⑵では前二者の出題は見られず，文字資料を主体に構成された印象が強い。なお，第２問と第４問の計11題（34点）が「日本史Ｂ」との共通問題であり，４点問題が４題出題された。

⑵　程度

問題の程度については，指導要領が求める資質・能力を逸脱しておらず，「知識の理解の質を問う問題」や「思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題」がバランスよく配置され，総じて適切であった。初見の資料が多数引用されたため，読解・解答に時間を要した受験者もいると思われるが，設問の趣旨は，指導要領に即して「近現代の歴史の考察に有効な諸資料」を積極的に活用する点にあり，また，歴史的事象の意味や意義に関する深い理解があれば，決して難易度の高いものではない。なお，文字資料は原則として原文のまま引いられたが，理解の補助として注釈が適宜付される配慮がなされた。文字資料の特性に対する理解を深める観点から，引用に際して原文を用いる方針は，今後も継続を望みたい。その一方，二文の正誤判別形式の出題については，解答に際して記述内容の精査が求められることから，やや難易度の高さを感じる出題もあった。幕末期におけるコレラの流行を問う設問（ 16 ）がその一例であり，また，誤文として判断する設問であるが，宝塚少女歌劇団に関する記述文中で井上準之助の名が登場したことに戸惑いを感じた受験者も存在すると思われる（ 26 ）。

4　表　現・形　式

⑴　形式

第１問・第３問がいずれも博物館あるいは歴史資料館を見学した高校生が諸資料を紹介する形式，第４問・第５問はともに身近な素材を主題としての出題であった。この点については，高等学校における授業への影響を含めて，次項で改めて述べてみたい。

小問における設問の形式としては，共通テスト⑴と同様，二つ以上の語句あるいは文の正誤の組合せを選択するものが多く，過半数にのぼった。これは，知識・理解あるいは思考・判断及び表現力の質を問う設問の割合が増えたことを意味し，単純な四択形式が減少したことによる。中でも，資料の読解と知識の組合せを問う形式が目立ったのは，共通テスト⑴と同様である。ただし，資料の読解により得た情報で判断する選択肢と，純粋な知識・理解のみで判断する選択肢が混在するケースが散見され（ 1 や 12 など），判断の根拠や基準を知識と資料読解のいずれに依るべきか，解答を導く上で混乱の生じた受験者もいたと思われる。その一方， 20 や 30 のように資料読解を主体とした設問は，解答が容易な印象を受けた。逆に，対蹠的・対比的な内容をもつ語句を選択肢に配した 5 や 10 などは，思考力・判断力・表現力等を問おうとする出題の意図が明瞭で，特に 23 は経済政策の目的・意義を判断する良問であった。

⑵　表現

全体を通して，語彙や表現に難解さを感じた箇所は見当たらなかった。前項でも触れたが，原文による文字資料には注釈が適宜付された配慮も歓迎したい。第２問・第５問では，設問中に図あるいは写真が登場した。しかし，いずれも効果的に使用されたとは言い難く，次年度以降，図版をさらに積極的に活用した出題を期待したい。その一方，共通テスト⑴にはなかった地図を使用し，地理的環境と関連付けて歴史的思考力を問う出題がみられた点は評価したい（ 7 ）。

5　ま　　と　　め（総括的な評価）

出題内容を総括すれば，指導要領が重視する「歴史の展開をその推移や変化，因果関係等の考察を通して大きくとらえること」や，「主題を設定して主体的に探究し表現する活動」が大きく反映されたものといえる。前者においては，我が国における政治・経済の動向を，その時々の国際環境や国民生活・文化の諸相との関連の中で捉える視点が各設問に顕著であった。また，後者においては，各大問の設定自体が，近現代の歴史と現在との結び付きに着目するとともに，課題意識に基づ

いた主体的な歴史学習を促し，豊かな歴史的思考力を育成しようとする方向性を体現するものとなっていた。

後者では特に，博物館や資料館を高校生が見学したとの設定の上で，館蔵の諸資料を素材とした出題が多かった点に注目したい。これは，様々な媒体が歴史的資料となり得ることに着目させるとともに，各資料の特性に気付かせ，文化財の歴史的意義を考察する学習を例示したものであり，高等学校における授業への提言として受け止めたい。博学連携や生涯学習，そして「総合的な探究の時間」等との教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの在り方を追究する上でも，博物館・資料館の積極的活用は求められており，授業改善に活かして参りたい。

日　本　史　B

1　前　　文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は，大学（専門職大学，短期大学，専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に，高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ。）の段階における基礎的な学習の程度を判定し，大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており，この目的自体は，従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方，共通テストでは，平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ，知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。日本史の問題作成方針にも，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

ここでは，本年度の問題について以下の視点から分析し，上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- 問題内容・範囲は適切であったか。
- 問題の文量・程度は適切であったか。
- 問題の表現・形式は適切であったか。

2　内　容・範　囲

第１問　２人の高校生の会話から，女性に関する史料を題材にして，縄文時代から明治・大正時代にわたる通史的な視点での出題がなされた。政治史，経済史，文化史に関する小問を中心に構成され，適切な史料を選択する問いもみられた。

問１　大正時代の出来事について，空欄に適する語句と文の組合せを選択する問題。史料を米騒動の内容と判断し，そこからその主体者と普通選挙制度の正確な理解が求められた。

問２　古代の３人の女性天皇に関する３文の年代整序問題。各文の出来事から天皇を推察し，古代の政治史の流れと関連付けて考察できるかが問われる問題であった。

問３　近世の天皇・朝廷について，誤文を判断する問題。女性天皇に関する知識とともに江戸幕府との関係性といった観点で正確な理解と総合的な思考力が求められる問題であった。

問４　与謝野晶子が書いた詩と同時期の情勢について記した史料を選択する問題。史料を読み解く読解力と論理的な判断力が求められた。

問５　中世の女性商人の手紙とされる史料について，２文の正誤を判断する問題。会話文から得た情報を統合させる考察力と史料（大意）を丁寧に読み解く読解力が求められた。

問６　女性の歴史に関する正文の組合せを判断する問題。用語に関する理解とともに，各時代における女性の地位や役割を正確に考察できるかが問われる問題であった。

第２問　三善清行が提出した「意見封事十二箇条」の序文の史料から，古代についての出題がなされた。政治史，文化史，社会史に関する小問を中心に構成され，表やレポートを用いた問いもみられた。

問１　古代の政治史に関する４文の正誤を判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力と天皇

の業績に関する正確な理解が求められた。

問２　古代の仏教と文化・政治についてまとめた表の空欄に入る文の組合せを選択する問題。古代の文化の特色に関する総合的な理解を近隣諸国との関係性も含めて求められた。

問３　仏教と政治・社会との関わりを述べた文から誤文を判断する問題。仏教の果たした役割を政治や社会との因果関係の中で正確に考察できるかが問われる問題であった。

問４⑴　レポートの空欄に入る文の組合せを選択する問題。律令制に基づく天皇主導の国家統治が終焉に近づく時代の中央と地方の動きを的確に考察できるかが問われる問題であった。

問４⑵　平安時代の地方の情勢に関する２文の正誤を判断する問題。レポートの内容を考察した上で，律令制における土地制度の実態に関する論理的な判断力が求められた。

第３問　中世の政治・社会・文化についての文章から，鎌倉時代や室町時代を中心とした出題がなされた。政治史，文化史，社会史に関する小問を中心に構成され，史料を用いた問いもみられた。

問１　文中の空欄に入る語句の組合せを選択する問題。11世紀以降の源氏の動きや奥州藤原氏に関する理解が求められた。

問２　中尊寺の寺僧を記した史料から読み取れる内容と史料そのものについて，正文の組合せを判断する問題。歴史書に関する正確な知識と史料を読み解く読解力が求められた。

問３　鎌倉幕府の組織編成や政治方針に関して誤文を判断する問題。歴史用語や地名から考察して鎌倉時代の政治史と関連付けて論理的に判断できるかが問われる問題であった。

問４　南北朝の内乱に関する２文が示す語句をそれぞれ選択する問題。幕府が発令した法令と南朝勢力の重要人物について正確な理解が求められた。

問５　信仰に関わる出来事の３文の年代整序問題。中世における仏教界の動向や為政者と仏教勢力との関係性など，出来事や関連性についての論理的な思考力が求められた。

第４問　享保・寛政の両改革期の間の時期をテーマとした内容で，生徒が書き出したホワイトボードから，江戸時代についての出題がなされた。政治史，外交史，文化史に関する小問を中心に構成され，史料や絵図を用いた問いもみられた。

問１　田沼時代に該当する４文の正誤を判断する問題。それぞれの選択肢の内容を江戸時代の政治史や外交史の流れのなかで位置付けて考察できるかが問われる問題であった。

問２　江戸幕府の支配の仕組みについて誤文を判断する問題。幕府の支配機構や法令について，正確な理解と論理的な思考力が求められた。

問３　江戸時代の銅版画に関する絵図から読み取れる内容とその時代背景にある思想や学問の動きについて，正文の組合せを判断する問題。江戸時代の文化が外国からの影響を受けてどのように変化したのか，歴史用語の知識とともに情報を分析する力が求められた。

問４　史料として工藤平助『赤蝦夷風説考』の一部を読み取り，２文の正誤を判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力と，「蝦夷」を取り巻く地域的な考察力が求められた。

問５　松平定信が記した史料から読み取れる内容と史料の時代背景について，正文の組合せを判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力と，都市と農村を関連付けて考察し，さらに商品経済の発展による因果関係を正確に考察できるかが問われる問題であった。

第５問　井上馨と渋沢栄一の関わりについて生徒が作成した年表から，幕末から明治時代にわたる出題がなされた。政治史，経済史に関する小問を中心に構成され，新聞記事を用いた問いもみられた。

問１　幕末の出来事に関する３文の年代整序問題。選択肢の内容から情報を分析し，外国との関係性を順序立てて考察する論理的な判断力が問われる問題であった。

問２　明治初期の財政に関する２文が示す語句をそれぞれ選択する問題。政府の組織や財政の状況を正確な語句として表現する力が求められた。

問３　明治時代の産業に関する２文の正誤を判断する問題。明治末期における生糸の役割や綿花の生産過程を日本経済の実態と関連付けて考察できるかが問われる問題であった。

問４　明治時代の政局を描写した新聞記事の内容について，正文の組合せを判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力と当時の内閣制度に関する正確な理解が求められた。

第６問　近現代の食文化・食生活についての文章から，幕末を含む近現代史の出題がなされた。政治史，経済史，外交史，社会史に関する小問を中心に構成され，表やデータを用いた問いもみられた。

問１　幕末から明治時代までの食に関わる４文の正誤を判断する問題。貿易上の品目，租税の仕組み，条約名とその内容，御雇外国人の業績など多岐にわたる分野からの出題であった。

問２　表中のＸ・Ｙとそれに該当するデータとの組合せを選択する問題。表は敗戦後から1995年までの一人一日当たりの食料消費量を示したもので，戦前から平成時代までのデータの特徴を考察した上で，該当する時期を選別する技能と分析力が求められた。

問３　近代における日本と東アジアの人々の移動に関する３文の年代整序問題。歴史用語だけでなく，選択肢の記述をしっかりと読み込み考察できるかが問われる問題であった。

問４　近代の都市や農村の人々の生活についての誤文を判断する問題。政府の経済政策が人々の生活に直結するものと関連付けて考察できるか，経済史の正確な理解が求められた。

問５　第一次世界大戦の直前における米の関税維持・廃止の支持層Ｘ・Ｙとそれぞれの指示の理由との組合せを選択する問題。関税を維持または廃止した場合の影響について考察し，支持の根拠となる理由と関連付けた思考力が求められた。

問６　戦時下の食に関する２文の正誤を判断する問題。リード文の内容を把握した上で，戦時下という特殊な時期の食糧事情に関する正確な理解が求められた。

問７　占領期の出来事に関する２文が示す語句をそれぞれ選択する問題。敗戦後の国内の混沌とした状況とアメリカの対日政策との関連性を含めた歴史用語の正確な理解が求められた。

３　分　量・程　度

問題数は大問が６題，小問が32題であった。昨年度のセンター試験に比べると，小問の数が４題減り，ページ数も３ページ少なくなった。しかし，リード文や史資料の文字数と難易度，60分の試験時間は適切であった。

問題の程度は基本的な事項や事柄を問う出題が中心であり，標準的な内容であった。具体的に小問をみていくと，7 は古代の政治・文化史を扱っているが，歴史の基礎知識と史料の読解力の両立を受験者に求める良問であった。単に歴史用語の知識や歴史事象の理解を測るのではなく，史資料を活用し関連付けてから考察・判断する力を求めるような問題が他にも散見された。10 は10世紀頃の律令制の実態を中央と地方の視点から問うた良問であるが，少し難しい問題でもあった。28 のように選択肢の意味する事象を的確に捉えなければ判断に迷ってしまう思考力を問われる問題もあった。受験者にとっては初見の史料も出されたが，全体的にみて難解な問題はほとんどなかった。普段から史料や図表などをしっかりと読み込んでおけば，十分に対応できる問題量であった。

４　表　現・形　式

設問形式は，文章の正誤を選択する形式や正しい文章の組合せを選択する形式が比較的多く，逆

に歴史用語の空欄補充は 12 のみであった。史料を用いた設問は計８題で， 4 は選択肢の中にも異なる史料を載せた珍しい形式であったが，４択の史料の時期が広がり過ぎたために問いの質としては容易であった。第４問のようにホワイトボードを掲示して出題する形式もあり，今回の共通テストでは会話文や調べ学習などを題材にした生徒目線での出題形式が複数みられた。

各大問の出題形式は，以下の通りである。

第１問　女性に着目して歴史を考察する会話の場面を二つ設けた。史料に関連する出題が半分を占めていたが，生徒が「主体的・対話的で深い学び」を実践する場面での史料の引用という展開であった。新学習指導要領の実施に向けて出題形式の工夫がなされていた。

第２問　古代の政治史と文化史の設問を史料・表・レポートと関連させながら多角的に組み立てた。 9 の選択肢は，前半の文章が同じで，後半の波線部を長文にして問う形式。

第３問　リード文に示された特定の時代（時期）から基礎的な用語の理解や史料の読解力などを問う形式であった。なお， 16 のような年代整序を選択する形式は，設問全体として４問であり，昨年度と同じ６択であった。

第４問　ホワイトボードを掲示して史料と絵図が用いられた。史料には適量の注釈が施され，史料読解にあたる際の配慮がなされていたが，これはほかの大問でも同様であった。

第５問　歴史事象の単なる年表ではなく，２人の人物を対比・関連させた年表を掲げての出題であった。とくに人物の接点から出題されるこのような形式は，今後も注目したい。

第６問　データを用いた出題や評価と根拠をめぐる出題など多様な設問形式がみられた。一方で， 32 の選択肢ａの二・一ゼネストは受験者が少し戸惑いそうな表現であった。

５　ま　と　め（総括的な評価）

⑴　高等学校の授業への影響

初めて実施された共通テストでは，問題作成方針で示されたとおり，「知識の理解の質を問う問題や思考力，判断力，表現力を発揮して解くことが求められる問題」が随所にみられ，出題教科の問題作成の方針にある「時代や地域を越えて特定のテーマについて考察したりする問題」は，たとえば 6 の形となって出題された。時代の範囲は，古代から近現代まで幅広く設定されたが，縄文時代の出題は１問にとどまった。分野の領域は政治史を中心に文化史・社会史が比較的多く，経済史や外交史を融合させる形態もみられた。学習指導要領の目標は，たとえば 20 の設問として具体化されるなど，全体的に教科書の内容に準拠した問題が出題された。

⑵　意見・提案等

第４問のような学習の過程を意識した問題の場面設定は，実際に教鞭をとっている者として歓迎したい。その意味から，生徒が主体的に取り組むきっかけになるのが身近な歴史の存在であり，第６問で取り上げた食文化・食生活は一つの好例である。さらにこの問いの中身に加え，都市の素材を取り込めば，現代とのつながりを一層実感できるのではないか。歴史と現代に生きる我々との“距離感”を，ぜひ今後の問題作成の中で検討していただきたい。

そしてもう一つ，昨今の社会情勢を鑑みて教育現場ではICT教育がますます浸透している。この流れに則していえば，情報化と歴史の共存ともいうべき新たな局面を迎えている教育現場での取り組みも，何らかの形で反映していただきたいと思う。

第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国歴史教育研究協議会

（代表者　川瀬　徹　　会員数　約16,200人）
ＴＥＬ　03-3392-1235

今年度の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）について，高等学校において授業を行う立場から，１の「はじめに」では共通テスト⑵「日本史Ａ」と「日本史Ｂ」の今年度の平均点など全般的な概略について，２の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について，３の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

１　は　じ　め　に

共通テスト⑵の平均点は「日本史Ａ」が45.56点，「日本史Ｂ」が62.29点であった。共通テスト⑴の平均点は，「日本史Ａ」が49.57点，「日本史Ｂ」が64.26点であったので，これらと比較すると，差はそれぞれ4.01点，1.97点となった。受験者数に大きな開きがあるため単純に比較することはできないが，共通テスト⑵は学校での学業の遅れなどを理由とする現役生が主な受験対象であったことから，共通テスト⑴との難易度の差が平均点の差にそのまま表れているわけではないと思われる。全体として，共通テストの趣旨に照らして不適切と思われる細かい知識を求めるような設問はなく，資料の多用などの特徴は共通テスト⑴と同様であった。

以下，それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

日本史Ａ

「日本史Ａ」の設問数は，平成28年度から大問５題，小問32題となり，今年度も同様となっている。出題範囲は幕末期の1850年代（ペリー再来航）から平成期の1990年代（京都議定書）まで，近現代史における出題である。なお，「日本史Ｂ」との共通問題は，大問２題で34点分となり，昨年度よりも２点分減少した。

出題形式では，正誤問題が８題（うち正文選択問題が４題，誤文選択が４題）と昨年度より４題減少し，全体の４分の１に低下した。また正誤の組合せは昨年度の３題から８題に増加した一方，語句の組合せは昨年度の５題から出題なしと大きく変わった。受験者が苦手とする形式では，年代配列は昨年度と同様の５題，正文の組合せは昨年度の３題から５題に増加した。また，昨年度より２題増えて６題となった人物・事項と内容の組合せであるが，内訳は文と語句の組合せが３題あった他，地図上の位置と文の組合せ，表・データの組合せ，説明文・理由文の組合せが各１題となった。ここ数年，組合せを選ぶ問題が増える傾向にあったが，単にリード文などの空欄に入れる語句の組合せに代わり，正誤，正文どうし，文と語句などの各組合せを選ぶ問題が明確に増え，組合せの種類も多岐にわたった。このような傾向の変化に，戸惑った受験者も少なくなかったと考えられる。

時代別では，幕末期が２題，明治期が８題，大正期が１題，昭和期が４題，戦後期が６題となっている。昨年度は６題に増加した大正期のみからの出題が，今年度は１題に減少した。一方，複数の時代にわたる時代横断の問題は，昨年度は８題に減少したものの，今年度は大正期にまつわる５

題を含む11題に増加した。この変化によって選択肢相互の時期の違いが明確な出題が増え，受験者にとって平易な問題が多い結果につながった。

分野別では，小問１題に複数の分野が混合する場合があるが，延べ数を挙げると，政治が11題，社会・経済が23題，軍事外交が８題，文化が６題，混合問題が15題出題された。昨年度は政治11題，社会・経済14題，軍事外交15題，文化４題，混合14題であった。昨年度と違う点は，社会・経済が９題増加，軍事外交が７題減少，混合問題が全体の半分を占めたことである。これは共通テスト⑴とも明確に異なり，比較的細かな知識・理解が必要な軍事外交分野よりも，現代的な諸課題と関連しやすい社会・経済分野の方が，共通テスト⑵に臨む受験者の取組みやすさへの配慮ともとれる。また混合問題の増加・定着傾向は，出来事の順序にしたがって，あるいは各分野に絞って各大問に取組めた以前の解答法とは異なり，受験者が各分野をまたいで様々な知識や思考などを用いる解答法を求めるものであり，個々の事項としてだけでなく因果関係などで関連づける学習が今後も重要となる。

史資料を活用した問題は，史料５題，地図２題，絵１題，表・統計２題と大幅に増加した。特に，高等学校の授業など基礎的な学習を前提にしつつも一般的な知識・理解とは異なる視点を取り入れた問題にも見られ，新高等学校学習指導要領の新科目「歴史総合」で求められる諸資料の活用を先取りした傾向であるとも考えられる。

共通テスト⑵は受験者が少なく平均点が公表されていないが，学習の遅れに対応するために設けられた趣旨に照らし，全体を通して平易な問題が多くを占めており，例年と比べると受験者には取組みやすい試験であったと言えよう。また，これまで大問の冒頭文にあった明確なテーマの提示や語句の組合せ問題がなくなるなど，来年度以降の出題の方向性も示唆している。以下，詳細について述べていく。

第１問は，休日に博物館を訪れた２人の高校生の会話がリード文となっており，３場面で構成されている。展示物である史資料とそれを見て互いの感想や考察を述べ合う２人の会話を組合せて出題している。場面Ａではペリー一行と交流した上陸地の庶民の記録，場面Ｂでは日比谷焼き打ち事件の様子を伝える絵，場面Ｃでは国際連盟脱退に関連する新聞記事を，それぞれ展示物として示している。問１はペリー来航時の庶民と幕府の対応について正誤の組合せを選ぶ問題である。いわゆる砲艦外交や「鬼や天狗みたいに描いた肖像画」をもとに恐れを抱く庶民の心情が強調されがちな内容であり，Ｘはその印象に依存させず史料の読み取りを促す文となっている。一方，Ｙが基本的な事項であり，平易な良問と言える。史資料の読み取りと知識・理解を問うこの形式は，今回のテストに繰り返し見られる。問２は明治初期の習慣・生活様式の変化についての誤文選択問題であり，基本的な事項が問われる。しかし「乗合自動車」「太陰太陽暦」や高札撤去などの事項を掲載していない教科書もあり，また文化分野は政治・経済分野に比べて高等学校の授業で扱う内容・量も十分ではない点も推察され，受験者の理解度に差異が生じやすい。より多くの受験者が答えられるような出題上の配慮をお願いする。問３は日露戦争について正誤の組合せを選ぶ形式である。Ｘは「映画」が大正期以降の大衆文化で普及した点，Ｙはこのような戦後処理が日比谷焼き打ち事件の要因となった点が判別できるかを問う内容で，平易な問題と言える。ただし，大衆文化で流行した映画（活動写真，あるいは昭和初期以降のトーキー）は大衆娯楽の一つとして理解する受験者が多いと思われ，Ｙが昭和期（戦前・戦中）に国民の戦争熱をあおるような「ニュース映画」が盛んになったことを踏まえた文であったとすれば，唐突な出題との印象をうける。問４は日露戦後の社会についての正文選択問題で，各選択肢に時代を特定できる用語が入っており，判別しやすく平易な問題である。ただし，①では国家総動員法による国民生活の統制・動員を「勅令で」行ったとあるが，「議会の承認なしに」とする例や手続き自体に触れない教科書などもみられ，若干の違和感があっ

た。問５は国際連盟脱退に関連する新聞記事について正しいものの組合せを選ぶ問題である。記事の文面は現代語とほぼ等しく，またリード文となっている会話文にもあるように，脱退を受けた「国民と松岡の間」の反応の違いをそのまま問う，平易な良問と言える。問６は国際連盟脱退までの外交に関する年代配列問題であり，説明文に会議・条約名が含まれ，単にその順序を頼りに解答できる問題となっており，工夫の余地があろう。会議・条約名を含まず，その内容と国内の反応を並べ替えるような出題であれば，当時の国際協調・軍縮の流れと国内の反応の変化についての因果関係も問うことができる。問７は1930年代前半の日本の対中軍事行動について，説明文と地図上の位置の組合せを選ぶ問題である。都市の位置と出来事の舞台となる時期がそれぞれ明確に判別できる平易な問題である。一方，Ｘにある「鉄道を爆破」は柳条湖事件を示唆しているので，「鉄道の線路を爆破」とすれば受験者に迷いがなくなるであろう。

第２問は「日本史Ｂ」との共通問題で，井上馨と渋沢栄一の関わりについての年表からの出題であった。問１は幕末の年代配列問題だが，Ⅰは年代の知識ではなく，「攘夷」とはどのような行為なのか（年表中のどれに相当するのか）を問う問題であった。Ⅱの時期特定は容易であるが，Ⅲは仮に「改税約書」という具体的な用語があったとしても，多くの受験者にとって時期の特定は難しかったであろう。特にⅠとⅢの順番には自信が持てなかった受験者が多かったと思われる。国内の攘夷運動の動向と列強による関税率引き下げ交渉を関連づける発展的な学習が必要であり，分野をまたいで一つの時代を捉える力が求められる難問である。問２は明治初期の政治組織や財政に関する設問で易しい。ｃ・ｄのいずれも明治初期の学習で扱う内容であるが，Ｙの「歳出を削減」に相当する方を選ぶ必要があり，政策の影響に関する理解が問われている。問３は製糸業や紡績業と貿易に関する基本的な理解を問う設問である。紡績業や製糸業が何を原料として何を生産するのかに関する知識と，明治時代の主な輸出品・輸入品に関する知識を組み合わせて解答する必要があり，産業と貿易を関連づけて理解できているかを問う良問であった。人名や工場名等の暗記学習にならないよう，こうした出題を今後も続けてほしい。問４はａが史料の内容に関する選択肢であったが，ｂは史料を読むよりも元老に関する知識を用いる方が容易に解答できたかも知れず，知識だけでは判断できないような，史料の内容に踏み込んだ選択肢とした方がよかった。ｃ・ｄは明治憲法に関する知識を問う選択肢で基本的な内容である。

第３問は，１人の高校生の資料館見学の様子と史料・説明を組合せたリード文となっており，２場面で構成されている。場面Ａでは私擬憲法の条文２種（史料１・２），場面Ｂでは日本の感染症の歴史に関する説明パネルを，それぞれ展示物として示している。問１は私擬憲法の条文の読み取りと作成者について，正しいものの組合せを選ぶ問題である。皇位継承，人身の自由，信教の自由に関する条文が抜粋されており，現代との違いを意識させる出題となっている。古い文体で書かれた各条文に多くの受験者はやや苦心するだろうが，日ごろから様々な史料に触れて丁寧に読み取るなど，暗記に頼らない学習を重ねて，ぜひ読み取ってもらいたい難易度である。また，ｃ・ｄはともに作成者について問うものであったが，一方を時期や地域などにふれる選択肢にするなど，私擬憲法に関する知識をより幅広く問う出題を求めたい。問２は自由民権運動の時期に起きた出来事についての誤文選択問題で，時期や事件を判別する人名・用語によって解答を導くことができる。問３は大日本帝国憲法の制定過程に関する正誤の組合せ問題で，基本的な事項を問う平易な問題である。問４は大日本帝国憲法の条文（史料３）をもとに，私擬憲法・日本国憲法との違いについての正しいものの組合せを選ぶ問題である。深い読み取りを必要とせず，解答は容易であろう。問５は19世紀の感染症と医学についての正誤の組合せ問題で，新型コロナウイルス感染症の流行など現代的な課題を意識させる出題となっている。ただし，Ｘにある開国直後のコレラ大流行は一般によく知られるところではあるが，教科書の記述や高等学校の授業での扱い方にバラつきが想定され，受

験者により解答の可能性に差が生じることからこのような出題には配慮をお願いする。問６は明治期に結核で亡くなった文学者と作品の組合せを選ぶ問題で，基本的な事項を問う平易な問題と言える。問７は健康や生命に関わる戦後期以降の社会問題についての年代配列問題である。各年代から当時の社会問題を象徴する出来事をバランス良く選んでおり，平易な良問である。

第４問は「日本史Ｂ」との共通問題で，近現代の食文化・食生活に関するリード文を読み解答する設問であった。中問Ａは，現代の食事や食文化の成立に関する文章で，問１は食を軸にして近代の経済・社会・文化を問う基本的な問題であった。正答である④は，他の選択肢と比べて記述が簡潔である上に，食に関することが直接的には書かれていない点でも他の選択肢と異質であり，設問全体としての一貫性が損なわれているように感じる。札幌農学校での教育内容に触れるなど，食に関わる一節を入れることで，内容も文章の長さも他の選択肢と統一感が出るのではないか。問２は表に入る数字を説明文から考える問題で，受験者はかなり時間を取られたのではないか。こうした資料を活用した問題は共通テストらしいが，この設問が日本史の出題として適切であったかは疑問である。この設問の解答に日本史の知識は一切必要なく，表の説明の文章が理解できれば，高校で日本史を一切学習していなくても解答可能である。史資料の読解は，日本史を理解するための手段であって目的ではないが，このような出題が続くと，日本史の学習が史資料の読み取り訓練に終始してしまうかも知れない。知識偏重の学習も戒めるべきであるが，このような文章やデータを読み取るだけで，日本史学習に活用できていない設問も今後は避けていただきたい。この設問であれば，問うべきは表の説明の文章の前半部分に書かれている，数値の変化の理由である。その部分も空所にして組合せ問題にするか，⑴・⑵に設問を分けて問うなど，表を読むだけで終わらない，日本史の学習成果も問われる設問づくりをお願いする。問３は日本と東アジアの人の移動に関する年代配列問題である。Ⅱの時期が特定できず難しく感じた受験者もいたであろうが，「委任統治下」の移住ということは，第一次世界大戦よりも後で，第二次世界大戦の敗戦よりは前である，ということに気付ければ解答可能であり，年代配列問題に年号暗記で対応しようとする受験者への警告にもなる設問である。中問Ｂは明治以降の米や麦に関する歴史についての文章で，問４は明治・昭和の社会に関する理解を問う問題であった。デフレで物価はどうなるのか，という理解を問う選択肢が②であり，解答は容易であっただろうが，③と④がどちらも昭和恐慌下に関する記述でバランスを欠くように感じる。どちらかは大正時代の人々の生活に関する内容の選択肢でもよかったのではないか。問５は関税の維持・廃止の意見と，その理由の組合せを問う設問で，受験者は解答に時間がかかったかも知れないが，難易度としては標準である。関税が国内の経済に与える影響を理解できていなければ解答不可能で，日本史の学習で得た知識が現代の私たちの生活を理解する上でも役に立つことを受験者に教えてくれる設問でもあった。問６は戦時下の食に関する設問で易しい。昨年度のセンター試験「日本史Ａ」追試でも「戦時代用食」に関する史料が出題されていた。問７は占領期の出来事に関する知識を問う設問で，ｂの食糧メーデーは昨年度のセンター試験「日本史Ａ」追試でも「飯米獲得人民大会」として出題された。ただし，Ｘの文章に「食料」とあるのでｂを選んで正解できた受験者もいたかも知れず，日本史の学習成果を測る上では選択肢の文章中に用いる単語に留意していただきたい。Ｙは経済的な内容であるが，ｄはｃと表面上似ているように感じるだけの用語であり，分野も異なるため，用語の内容を理解できていた受験者には易しかったであろう。

第５問は，人の移動と住環境の変遷について３人の生徒が授業で発表した内容をリード文としている。テーマは，身近な家族の移動と住環境の変遷，住環境と国内外の政治情勢との関係，戦後の住宅政策である。問１は大正期・昭和戦前期における人の移動に関連して正誤の組合せを選ぶ問題である。Ｘは「井上準之助」よりも，例えば東急の創業に携わった「五島慶太」などの人名を用いたいが，高等学校の授業で扱うことも少ないと考えられ，「宝塚」の地名を変えて誤文とする方が

無難であろう。Ｙは受験者には迷わず正答してほしい文である。問２は集団就職が盛行した1960年代についての正文選択問題である。各選択肢は1950年代から90年代における産業・経済の特徴をわかりやすくまとめており，用語だけでも正答にたどり着くが内容の理解を伴って取組みたい良問と言える。問３は1920年代から30年代にかけての日本の社会・文化についての誤文選択問題である。基本的な事項を問う平易な問題と言える。問４は米軍の駐留や米軍基地に関する年代配列問題であり，説明文に時期を判別できる用語が含まれ，単にその順序を頼りに解答できる問題となっている。ただし用語を含まず，その内容や背景をまとめた文を並べ替える出題であれば，米軍基地問題などの変遷についての因果関係も問うことができる。現代的な重要課題でもあり，あと少し工夫がほしい。問５は米軍基地の存在が地域社会に与えた影響について，図や表を参考にして，適する文の組合せを問う問題である。基地返還の前後における土地利用や地域経済の変化を考察させており，現代的な諸課題の形成にアプローチする意欲的な良問との評価もできるが，一方で高等学校の授業で学んだ事項を活用しなくとも解答は可能である。このような作問は今後，新高等学校学習指導要領の新科目「地理総合」・「地理探究」での出題も予想される。問６は敗戦直後の住宅難についての正誤の組合せを選ぶ問題で，高等学校の授業で学ぶ基本的事項から解答できる平易な問題である。問７は高度経済成長期の住まいと暮らしについての正文選択問題である。平易な問題ではあるが，②の「農村部の過疎化対策」に関して判別できる受験者は少ないように思われる。他のものと同様に時期などを特定できる用語を含む選択肢とすれば，問題としてのバランスも良く，受験者も取組みやすい。

日本史Ｂ

「日本史Ｂ」について，設問数は大問６題，小問32題の構成であった。昨年の本試験，追・再試験に比べ，小問数は４題減少し，「日本史Ａ」と同じ数であった。生徒の学習活動を想定したリード文が多かったり，史料や表がリード文の代わりになっていたりするなど，共通テスト⑴と同様，リード文の形式がセンター試験と異なる大問が多かった。小問でも，史資料の読み取りが多く求められる問題や，空所に文を補充する問題など，語句の知識に偏らない学習を受験者に促す良問が多く見られた。小問数の減少も，こうした設問の変化を踏まえれば妥当なものであったと言えよう。

出題範囲は古代（縄文）～現代（戦後）までであり，「日本史Ｂ」の学習範囲内で適切な設定であった。ただし，戦後史については，共通テスト⑴が高度経済成長期まで出題していたのに対し，共通テスト⑵では占領期までの知識しか問われていない。第６問の問２は2005年のデータを扱っているが，設問の解答とはほぼ関係なく，知識も求められていない。学業の遅れに対応するための共通テスト⑵であることを考えれば，共通テスト⑴よりもさらに新しい時期についての学習成果を問う設問があってもよかったのであろう。

出題形式別では，人物・事項の組合せが７題，正誤問題（誤文），正誤の組合せ，正文の組合せが各５題，正誤問題（正文），年代配列が各４題，語句の組合せが２題であった。問題番号 8 や 10 のような，空欄に文章を補充する形式の問題も「人物・事項の組合せ」に分類したが，正誤問題等も含め，文章で理解を問う問題が非常に多かったのが特徴であった。一方で，語句の組合せ問題が激減している点も共通テスト⑴と共通しており，受験者にどのような学習を求めているかがよく表れていると言えよう。

時代別では，昨年度と同様，時代横断型の出題が最も多く，11題であった。各時代単独の出題は，江戸が６題，明治が３題，平安，鎌倉，大正，戦後が各２題，南北朝，室町，幕末，昭和が各１題であった。旧石器～奈良時代と，院政期，戦国～織豊期は単独では出題されていないが，時代横断型の出題を含めると，全く出題がなかったのは旧石器，弥生，戦国のみであった。特に江戸時代よ

りも前の時代については，時代横断型の設問での出題が多く，時代をまたいだ歴史の流れを理解したり，異なる時代と比較して共通点・相違点を把握したり，といった学習が求められている。一方で，江戸時代については，単独での出題が６題と最も多い一方で，時代横断型での出題は１題であり，全体として見ると，江戸時代の比重が高い出題であった印象を受ける。江戸時代の比重をもう少し下げた方がバランスの取れた出題になったのではないか。

分野別では，複数分野の混合問題が17題あった。これを時代別の出題数と併せて見ると，混合問題のうち７題が時代横断型の出題であり，「日本史Ｂ」全32題のうち７題は時代も分野も複数にまたがった問題であったことがわかる。時代や分野を区切った学習は，歴史の理解の土台を築く上で必要だが，それにとどまらず，時代・分野ごとの理解を他の時代・分野と関連させて理解を深める学習が求められている。混合問題も含めた分野ごとの出題数は，社会・経済が最も多く17題，政治が13題，軍事・外交が10題，文化が９題であった。受験者の知識だけでなく理解も問いやすい社会・経済分野の比重が高かったことは，共通テスト⑴と共通しているが，今後，他分野（特に日本史学習の軸となる政治分野）でも様々な史資料から受験者の理解を問う設問が多く作られることを期待している。

次に，各設問の詳細を見ていく。

第１問は昨年度のセンター試験と同様，高校生の会話をリード文として用い，日本史上の女性と史料について古代から近代までの内容が問われた。中問Ａは米騒動に関する史料と，女性天皇に関する設問があり，問１は史料１を読んで決起した主体を解答する史料読解問題と，米騒動と普通選挙法の成立の前後関係を問う組合せの出題であった。特に空所 ア は，米騒動の基本的な知識をもとに史料１を読めば確実に解答可能だが，知識があっても史料を読まなければ自信をもって解答しづらい語句で，逆に知識がなければ史料１はやや読みにくいため，日本史学習で得られた知識をもとにした史資料の読解力を問う良問であった。なお，異なる素材であるが，米騒動の史料は昨年度のセンター試験日本史Ａ追試でも出題された。問２は古代の女性天皇の事績を古い順に並べ替える問題で，Ⅲが阿倍比羅夫の時期を問うやや難しい設問であった。問３は近世の天皇・朝廷に関する知識を問う設問で，①は禁裏御料に関する基本的な理解を問うており，標準的な難易度である。中問Ｂは日本史上の女性の活動を示す史料を扱った問題で，問４は「君死にたまふこと勿れ」の時期に関する知識を前提に，選択肢の史料の時期を特定し解答する力が求められた。受験者にとって初見の史料であっても，「日露の戦争」など，時期を判断しやすい部分が含まれており，史料を読む学習を十分に行ってきた受験者にとっては標準的な難易度であっただろう。問５はＸが受験者にとって馴染みのない内容であり，戸惑ったかも知れないが，日本史を学習する上で欠かせない「史料」自体について，受験者に気付きを与えられる文であった。また，Ｙは「割符」の知識がなければ読みにくい史料で，問１と同様，日本史の知識をもとにした史料読解を求める良問であった。問６は日本史上の女性に関する文章の正誤を判断する問題で，基本的な知識を活用することで解答が可能である。

第２問は，「意見封事十二箇条」をリード文とする設問で，問１は史料の内容の読み取りが求められた。①・②は史料を読まなくても誤文と判断できた受験者もいたであろうが，③・④は史料を読む必要があり，史資料読解を重視する共通テストの方向性がよく表れている。問２は飛鳥文化・白鳳文化・天平文化の特徴に関する基本的な理解を問う設問で，文化史の学習を単語の暗記で済ませてしまう受験者に警鐘を鳴らす良問である。問３は史料・表や知識をもとに解答する設問で易しいが，①・②・④が史料・表の内容に基づいた記述であるのに対し，③の誤りの部分だけは史料・表を見なくても判断可能であったのは残念であった。問４⑴は醍醐・村上朝のころの政治や社会に関する基本的な理解を問う設問であった。ａは藤原忠平がやや詳しい事項と言えるが，ｂは藤原良房・基経から時期を判断しやすかったであろう。こうした具体的な人名などの歴史用語をなるべく使わ

ず，文章の内容から時期を特定するような出題も今後増えるものと期待したい。⑵は10世紀頃の地方社会と，醍醐朝の政策に関する標準的な問題である。

第３問は従来のセンター試験と同形式の，リード文をもとにした出題であった。中問Ａは頼朝の奥州合戦についての文章で，問１は今回数少ない語句の組合せ問題である。［ア］が時期的にやや離れた用語を誤答に入れている一方，［イ］は奥州藤原氏の紛らわしい人名で，しかも時期的に近い人物であるため，受験者にはやや厳しい出題だったと考えられる。「藤原清衡」を誤答とした方が，多くの受験者が具体的な事績を思い出しやすい人物でもあり，親切な出題となったであろう。史資料読解を重視するあまり，知識を得る学習を軽視する風潮が生まれないよう，今後もこうした用語を問う形式の出題は維持していただくようお願いする。問２はａ・ｂが出典に関する基本的な知識，ｃ・ｄが史料の内容の読解であり，これまでもセンター試験で出題されてきた形式であるため，受験者も解きやすかったであろう。問３は鎌倉幕府に関する設問で易しい。平清盛の事績に関する知識も求められており，近い時期の政権について比較しながら特徴を把握しておく必要がある。中問Ｂは南北朝の内乱に関する文章で，問４は中世の事項や人物に関する語句と説明文を組合せる設問である。ｄの懐良親王はやや詳しい事項に属するとも言えるが，ｃの以仁王は基本的な語句であり，解答は容易であろう。問５は中世の宗教に関する年代配列問題で，日本史の学習では複数の分野にまたがる内容であるが，時代を意識した学習ができていれば容易である。

第４問は，田沼時代に関するメモをもとにした設問である。問１は❷の明和事件がどの時期か，印象にない受験者も多かったであろうが，他の選択肢は時期がわかりやすいため，解答は容易であったと考えられる。問２は江戸幕府の機構に関する設問であるが，❸は用語ではなく内容的な誤りで，第１問の問３と同様，用語の理解が問われている。歴史用語を覚えるだけでなく，その用語について説明できるような学習が求められている。問３はａ・ｂが絵画の特徴を読み取る設問であるが，日本史の知識も解答に必要となり，これも知識を前提とした史資料読解力を求める良問である。問４は，『赤蝦夷風説考』の内容に関する出題であった。この史料は多くの受験者にとって初見で，史料をしっかり読まなければ解答できないため，受験者にとっては難易度が高く，時間もかかったと推測される。しかし，田沼時代に関する知識を基にすれば史料を読み取りやすく，また史料を読めば十分に解答可能であり，これも知識と読解の両方を求める良問である。問５はａ・ｂが史料の内容に関する選択肢で，当時の社会に関する知識をもとに史料を読めば内容を把握しやすい。また，史料を読む際に，ただ単語を拾うのではなく，主語は何か，などを意識しながら内容を把握するような読み方を求めており，受験者に対して，史料の読み方についての示唆を与える設問でもある。ｄも，村方騒動とは何かという内容理解を問う選択肢であったが，ｃの「西洋で生まれた人権意識」という文言は，日本史の学習経験がない者でも違和感があると考えられる。選択肢の誤りの部分の作成に工夫をお願いする。「百姓一揆や打ちこわし」でｄと対になる選択肢を作る場合，ホワイトボードの「西洋の学術が取り入れられた」という記述を活かすのであれば，「医学や天文学の研究が進んだ」の部分を下線部とすることで，内容理解を問う選択肢を作成しやすくなったのではないかと考えられる。

第５問は「日本史Ａ」との共通問題で，井上馨と渋沢栄一の関わりについての年表からの出題であった。問１は幕末の年代配列問題だが，Ⅰは年代の知識ではなく，「攘夷」とはどのような行為なのか（年表中のどれに相当するのか）を問う問題であった。Ⅱの時期特定は容易であるが，Ⅲは仮に「改税約書」という具体的な用語があったとしても，多くの受験者にとって時期の特定は難しかったであろう。特にⅠとⅢの順番には自信が持てなかった受験者が多かったと思われる。国内の攘夷運動の動向と列強による関税率引き下げ交渉を関連づける発展的な学習が必要であり，分野をまたいで一つの時代を捉える力が求められる難問である。問２は明治初期の政治組織や財政に関す

る設問で易しい。ｃ・ｄのいずれも明治初期の学習で扱う内容であるが，Ｙの「歳出を削減」に相当する方を選ぶ必要があり，政策の影響に関する理解が問われている。問３は製糸業や紡績業と貿易に関する基本的な理解を問う設問である。紡績業や製糸業が何を原料として何を生産するのかに関する知識と，明治時代の主な輸出品・輸入品に関する知識を組み合わせて解答する必要があり，産業と貿易を関連づけて理解できているかを問う良問であった。人名や工場名等の暗記学習にならないよう，こうした出題を今後も続けていただくようお願いする。問４はａが史料の内容に関する選択肢であったが，ｂは史料を読むよりも元老に関する知識で解答した方が受験者にとっては容易であったかも知れず，知識だけでは判断できないような，史料の内容に踏み込んだ選択肢であった方がよかった。ｃ・ｄは明治憲法に関する知識を問う選択肢で基本的な内容である。

第６問も「日本史Ａ」との共通問題で，近現代の食文化・食生活に関するリード文を読み解答する設問であった。中問Ａは，現代の食事や食文化の成立に関する文章で，問１は食を軸にして近代の経済・社会・文化を問う基本的な問題であった。正答である❹は，他の選択肢と比べて記述が簡潔である上に，食に関することが直接的には書かれていない点でも他の選択肢と異質であり，設問全体としての一貫性が損なわれているように感じる。札幌農学校での教育内容に触れるなど，食に関わる一節を入れることで，内容も文章の長さも他の選択肢と統一感が出るのではないか。問２は表に入る数字を説明文から考える問題で，受験者はかなり時間を取られたのではないか。こうした資料を活用した問題は共通テストらしいが，この設問が日本史の出題として適切であったかは疑問である。この設問の解答に日本史の知識は一切必要なく，表の説明の文章が理解できれば，高校で日本史を一切学習していなくても解答可能である。史資料の読解は，日本史を理解するための手段であって目的ではないが，このような出題が続くと，日本史の学習が史資料の読み取り訓練に終始してしまうかも知れない。知識偏重の学習も戒めるべきであるが，このような文章やデータを読み取るだけで，日本史学習に活用できていない設問も今後は避けていただきたい。この設問であれば，問うべきは表の説明の文章の前半部分に書かれている，数値の変化の理由である。その部分も空所にして組合せ問題にするか，⑴・⑵に設問を分けて問うなど，表を読むだけで終わらない，日本史の学習成果も問われる設問づくりをお願いする。問３は日本と東アジアの人の移動に関する年代配列問題である。Ⅱの時期が特定できず難しく感じた受験者もいたであろうが，「委任統治下」の移住ということは，第一次世界大戦よりも後で，第二次世界大戦の敗戦よりは前である，ということに気付ければ解答可能であり，年代配列問題に年号暗記で対応しようとする受験者への警告にもなる設問である。中問Ｂは明治以降の米や麦に関する歴史についての文章で，問４は明治・昭和の社会に関する理解を問う問題であった。デフレで物価はどうなるのか，という理解を問う選択肢が②であり，解答は容易であっただろうが，❸と❹がどちらも昭和恐慌下に関する記述でバランスを欠くように感じる。どちらかは大正時代の人々の生活に関する内容の選択肢でもよかったのではないか。問５は関税の維持・廃止の意見と，その理由の組合せを問う設問で，受験者は解答に時間がかかったかも知れないが，難易度としては標準である。関税が国内の経済に与える影響を理解できていなければ解答不可能で，日本史の学習で得た知識が現代の私たちの生活を理解する上でも役に立つことを受験者に教えてくれる設問でもあった。問６は戦時下の食に関する設問で易しい。昨年度のセンター試験「日本史Ａ」追試でも「戦時代用食」に関する史料が出題されていた。問７は占領期の出来事に関する知識を問う設問で，ｂの食糧メーデーは昨年度のセンター試験「日本史Ａ」追試でも「飯米獲得人民大会」として出題されたが，「日本史Ｂ」の学習ではあまり馴染みのない用語であろう。ただし，Ｘの文章に「食料」とあるのでｂを選んで正解できた受験者もいたかも知れず，日本史の学習成果を測る上では選択肢の文章中に用いる単語に留意していただきたい。なお，ａは「日本史Ｂ」でも一般的に学習する用語であり，消去法でも解答可能ではある。Ｙは経済的な

内容であるが，ｄはｃと表面上似ているように感じるだけの用語であり，分野も異なるため，用語の内容を理解できていた受験者には易しかったであろう。

３　ま　と　め

今年度から共通テストが始まり，受験者は例年と異なるテストへの不安を強く抱いていたと考えられる。特に共通テスト⑵は，休校等による学習の遅れや共通テスト⑴の追・再試験として設定されたもので，例年の追・再試験とも位置付けが異なり，受験者の不安は一層大きかったものと思われる。一方で問題作成者にとっても，今後の共通テストの方向性を決める初めての試験であり，作問の苦労は例年と比較にならないものであったと推察する。そうした中で，このような質の高い問題を作成された作問関係者各位に敬意を表したい。

「日本史Ａ」は，全体を通して様々な史資料を活用して思考・判断させる問題が多く，新課程も見通した作問の工夫が伺える構成であった。史資料については，庶民や民間の諸機関による資料（日記，新聞記事，私擬憲法）や憲法条文・地形図や統計など，種類や分かりやすさに配慮が感じられ，また解答に必ず史資料の読み取りを要する問題づくりも随所で意識されている。受験者にとっては，史資料の読み取りを要することから，従来の問題に比べ解答自体に時間や手間を求められるため，今回の形式に慣れるべく類題に取組んでいくことが求められる。受験者僅少のため平均点は公表されていないが，概ね平易な問題であり，例年であれば平均点の上昇も期待できる難易度であったと考える。史資料や題意の分かりやすさが今後も維持されることをお願いしたい。

次に「日本史Ｂ」は，共通テスト⑴と同様に，時代・分野をまたがった設問が多く出題され，俯瞰的な日本史学習の成果を問う設問が多かった。また，史資料を読解させる設問や，日本史の理解を文章で問うような設問もこれまで以上に多くなった。日本史教育に携わる人々や，来年度以降の受験者に対して，日本史学習の在り方についての一つの方向性を提示することもできたのではないか。今後，学習指導要領の改訂によって歴史系科目も大きな変化を迎えるが，来年度以降はそうした変化を先取りしたような設問がさらに増え，教育現場により強くメッセージを発していただけるものと期待している。一方で，知識を獲得するための学習を疎かにする風潮が生じることも危惧している。受験者が，思考・判断の土台は正確かつ十分な量の知識であることを実感できるような出題を強く求めたい。さらに，今回のテストでは共通テスト⑴とともに社会経済分野の出題が多く，時代についても江戸時代の比重が高い印象を受けたと述べたが，こうしたアンバランス感を払拭することが，受験者の有意義な日本史学習にもつながる。特に，社会経済分野以外でも今回のような知識と史資料に基づく思考を求める設問が多く出題されることを期待している。

なお，毎年のように述べていることではあるが，「日本史Ａ」「日本史Ｂ」の科目としての性格の違いを考えれば，共通問題の出題はできるだけ避けていただきたく，引き続き検討をお願いする。

第３　問題作成部会の見解

日　本　史　Ａ

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　「学習指導要領」２⑵「近代の日本と世界」のうち，ア⑺「近代国家の形成と国際関係の推移」の「欧米諸国のアジア進出，文明開化」と「社会や文化の変容」・イ⑴「国内の経済・社会の動向」などを問うたほか，ウ「近代の追究」の「具体的な歴史的事象と関連させた適切な主題」として，「民衆の世論と外国・外交」というテーマを設定したリード文を掲げ，関連する近現代日本史の基本的事項を問うことをねらいとした。

問１　資料から読み取った情報と歴史的事象との関わり，また資料から読み取った情報や習得した知識を活用して，歴史的事象の推移や変化について考察することができるかを問うた。

問２　外国の文化との接触が深まった時期（文明開化期）における，人びとの習慣・生活変化についての理解を問うた。

問３　日露戦争後の状況をとらえるため，講和条約とメディアに関する知識を問うた。

問４　日露戦争後（明治後期）における社会状況についての理解を，政府の対応を通して問うた。

問５　資料（新聞記事）から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推することができるか。また資料から読み取った情報や習得した知識を活用して，歴史的事象の推移や変化について考察することができるかを問い，良問と評価された。

問６　「戦間期における平和と軍縮・協調外交」という歴史的事象を時系列的にとらえることができるか，また事象の展開をふまえ，日本と世界の歴史の展開や相互の関連等について，歴史的な意味や意義を総合的にとらえることができるかを問うた。

問７　東アジアの地図資料から読み取った情報（都市所在地）と歴史的事象（満州事変・上海事変）との関わる思考力・判断力を求めた。

第２問　幕末から明治にかけて活躍した人物の年表を掲げ，幕末から明治にかけての政治・経済・外交に関する基本事項を問うた。なお，本問は「日本史Ｂ」第５問との共通問題である。

問１　幕末における対外関係の展開を時系列的にとらえることができるかを問う問題である。

問２　近代日本の財政・金融制度の成立に関して，習得した知識を活用して，歴史的事象の推移や変化について考察することができるかを問う正文の組合せ問題。

問３　近代産業の導入・発展とその影響について，複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえることができるかを問う正誤の組合せ問題。産業と貿易を関連づけて理解できてい

るかを問う良問という評価を受けた。

問４　大日本帝国憲法下の政治制度に関する知識・理解を問うとともに，近代史料の読解の技能を問う問題。

第３問　「学習指導要領」日本史Ａ２⑵近代の日本と世界⑺「近代国家の形成と国際関係の推移⑺」における「開国から明治維新を経て近代国家が形成される過程について考察させる」という内容を踏まえ，「社会や文化の変容」および「立憲体制の成立」に着目してリード文Ａ・Ｂを配した。Ａでは学習指導要領２⑵アに定める「近代国家が形成される過程について考察させる」ことを目指し，立憲政体の萌芽期にかかわる基本的事項を問うテーマを設定した。Ｂでは学習指導要領２⑵ウに定める「文化の動向が相互に深くかかわっているという観点から（中略）歴史的な考え方を育てる」という眼目をふまえ，医療・生命と科学の連繋を問うテーマとした。「明治期を中心として近現代全般にわたる政治史，社会史及び文化史について問う問題」として指摘された。

問１　私擬憲法およびその成立背景について，資料から読み取った情報や習得した知識を活用して，歴史的事象について考察する力を問う問題。「日ごろから様々な史料に触れて丁寧に読み取るなど，暗記に頼らない学習を重ねて，ぜひ読み取ってもらいたい難易度」と評価された。

問２　私擬憲法の時代背景となる自由民権運動の起こった時期の歴史的事象を時系列的にとらえる力を問う問題。

問３　大日本帝国憲法の成立経緯について，枢密院の機能とお雇い外国人に関する知識理解を問う問題。「基本的な事項を問う平易な問題」と指摘された。

問４　私擬憲法・大日本帝国憲法・日本国憲法について，資料から読み取った情報や習得した知識を活用して，歴史的事象の推移や変化について考察する力を問う問題。「深い読み取りを必要とせず，解答は容易であろう」と指摘されたが，標準的な難易度であったと考えている。

問５　感染症と医学に深くかかわる事象を通じて，地域間の接触や交流の作用に対する理解を問う問題。「教科書の記述や高等学校の授業での扱い方にバラつきが想定される」との指摘もあったが，学習指導要領・各教科書を精査し，その範囲内で出題している。この点については，今後いっそう留意したい。

問６　当該期の文学作品との関わりを通して，感染症の社会への影響を考える力を問う問題。

問７　健康や生命の問題を通して，歴史的な関連及び意義を総合的にとらえる力を問う問題。「各年代から当時の社会問題を象徴する出来事をバランス良く選んで」いると評価された。

第４問　「学習指導要領」２⑶「近現代の歴史にかかわる身の回りの社会的現象と関連させた適切な主題を設定させ（中略）歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」に基づき，食生活，食文化といった身近なテーマに関する文章を通して，これに関連する近現代日本の基本的事項を問うことを狙いとした。

問１　食に関わる経済・社会・文化の基礎的事実を問う問題である。政治・外交・社会・経済・文化史の全般にわたる理解を求めた問題という意見があった。

問２　食糧消費量のグラフから，第二次世界大戦以降の食生活の洋風化などの変化を問うた問題である。「資料を活用した問題は共通テストらしい」という評価があった。

問３　日本を含めた東アジアにおける人の移動について，基礎的事実を問うた。「年代配列問題に年号暗記で対応しようとする受験者への警告にもなる設問である」という評価を得た。

問４　都市と農村の生活について，歴史的事実の理解を問うた。「明治期から昭和戦前期の社

会・経済史に関わる理解及び思考力・判断力が求められる」と評価がある一方，「解答は容易であっただろう」と指摘もあった。

問５　関税政策の立場の違いを通して，第一次大戦期の政治状況の理解を問うた。「日本史の学習で得た知識が現代の私たちの生活を理解する上でも役に立つことを受験者に教えてくれる設問でもあった」と評価された。

問６　戦時期の生活状況，特に食糧事情についての基礎的事実を問うた。「同時期の人々の生活の様相について社会的背景の中で思考力・判断力が求められる」と評価がある一方で「戦時下の食に関する設問で易しい」との指摘もあった。

問７　戦後復興期の日本社会と占領政策の動向についての基礎的事実を問うた。「用語の内容を理解できていた受験者には易しかったであろう」と指摘があった。

第５問　「学習指導要領」２⑴「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から，近現代の歴史的事象と現在との結び付きを考える活動を通して，歴史への関心を高め，歴史を学ぶ意義に気付かせる」に基づき，人の移動と住環境の変遷をテーマとする授業を設定し，戦前・戦後の政治・外交・文化に関する基本的理解と分析的・関連的・判断的思考を問うた。

問１　戦前期の私鉄沿線開発および戦時期の学童疎開についての知識・理解を問うた。各時期の社会の様相についての理解及び思考力・判断力が求められるとの評価を得た。

問２　集団就職についての理解を問うた上で，戦後経済について，時系列的にとらえることができるかを問うた。各選択肢は1950年代から90年代における産業・経済の特徴をわかりやすくまとめており，内容の理解を伴って取組みたい良問と言えるとの評価を得た。

問３　第一次世界大戦後の大衆文化について，国境を越えた地域間の接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを問うた。大正期から昭和中期の世相についての理解が求められる問題との評価を得た。

問４　戦後の日米安保体制について，時系列的にとらえることができるかを問うた。第二次世界大戦後の日米外交が社会に与えた影響についての総合的な思考力・判断力が求められるとの評価を得た。

問５　沖縄米軍基地という現代の課題について，歴史的に考察することができるかを問うた。基地返還の前後における土地利用や地域経済の変化を考察させており，現代的な諸課題の形成にアプローチする意欲的な良問との評価も得た。

問６　敗戦直後の住宅難について，資料から読みとった情報と歴史知識を活用して考察する力を問うた。当時の人々の暮らしを歴史的・社会的背景の中で思考力・判断力が求められるとの評価を得た。

問７　戦後の住まいと暮らしについて，歴史知識の基本的な理解を問うた。高度経済成長の光と影に関わる知識と，資料を正確に読解する技能が求められるとの評価を得た。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

高校教員からは，「近現代の歴史と現在との結び付きに着目するとともに，課題意識に基づいた主体的な歴史学習を促し，豊かな歴史的思考力を育成しようとする方向性を体現するもの」と評価された。また，場面設定として博物館や資料館を用いたことについても，文化財の歴史的意義を考察する学習を例示したものとして好意的に受け止められた。教育研究団体からは，「全体を通して様々な史資料を活用して思考・判断させる問題が多く，新課程も見通した作問の工夫が伺える構成」との評価を受けた。多様な資料を用いつつ，「解答に必ず史資料の読み取りを要する問題づくりも

随所で意識されている」という評価もいただいた。

今後もこれらの点を継続しつつ，設題形式をいっそう工夫し，歴史的な思考力を問う問題となるよう留意していきたい。

４　ま　　と　　め

本部会は，問題作成上の留意点として以下の４点を挙げている。

・　高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく，平均点を上げるため，標準的な問題を作成するように一層心掛ける。
・　高校現場での授業に配慮する。
・　問題領域や設問形式のバランスや文字資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ，「歴史的思考力」を問う問題を多く出題するように工夫する。
・　「日本史Ｂ」との共通問題の難易度について更に配慮する。

来年度も，センター試験や今年度の共通テストでの知見の蓄積を活用し，また今回ご指摘いただいたことも踏まえ，問題作成を行っていく。

日　本　史　Ｂ

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　「学習指導要領」日本史Ｂ「１目標」に示された「我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせる」と記されていることをふまえ，一般に「伝統」として誤解されていることも多い日本社会における女性の位置付けに関する通史的な考察とすること，同「３内容の取扱い」で，「様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って，資料に対する批判的な見方を養うとともに，因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりすること」と記されていることを踏まえ，教師などから示された史料をめぐる高校生同士の対話という場面設定を通じ，女性の視角，あるいは史料の保存・伝来という視角を含めて，史料を多角的，批判的に読み取る必要性を提示することを狙いとした設問である。縄文時代から明治・大正時代にわたる通史的な視点での出題であり，政治史，経済史，文化史に関する小問を中心に構成され，適切な史料を選択する問いもみられたと評価された。

問１　近代の米騒動と，同時期の議会制度に関する理解を問う問題。日本史学習で得られた知識をもとにした史資料の読解力を問うた良問と評価された。

問２　古代の女性天皇の治績に関する年代整序を問う問題。各文の出来事から天皇を推察し，古代の政治史の流れと関連付けて考察できるかが問われる問題と評価された。

問３　近世の天皇・朝廷，及び江戸幕府との関係に関する理解を問う問題。女性天皇に関する知識とともに江戸幕府との関係性といった観点で正確な理解と総合的な思考力が求められる問題と評価された。

問４　日露戦争に関する理解を問う問題。「史料を読み解く読解力と論理的な判断力が求められた」問題と評価された。

問５　中世の商業，および史料の保存伝来という問題に関する理解を問う問題。会話文から得た情報を統合させる考察力と史料(大意)を丁寧に読み解く読解力が求められた問題であり，日本史の知識をもとにした史料読解を求める良問」と評価された。

問６　日本史上の女性に関する理解を問う問題。用語に関する理解とともに，各時代における女性の地位や役割を正確に考察できるかが問われる問題と評価された。

第２問　「学習指導要領」第４日本史Ｂの「２内容⑴原始・古代の日本と東アジア」に拠り，史料に基づいて歴史を考察する方法についての理解を測ることを目的とし，「意見封事十二箇条」を素材として，史料読解，及び飛鳥時代から平安時代までの政治・文化・社会などについて問うた。古代の政治史と文化史の設問を史料・表・レポートと関連させながら多角的に組み立てた問題であるとの評価を受けた。

問１　古代の政治・文化に関する知識を活用して史料を読み解き，文章の正誤を判断する問題である。史料を丁寧に読み解く読解力と天皇の業績に関する正確な理解が求められ，歴史の基礎知識と史料の読解力の両立を受験者に求める良問であると評価された。

問２　古代の諸文化を比較し，各文化の特色や差異を捉える力を問うた問題である。古代の文化の特色に関する総合的な理解を近隣諸国との関係性も含めて求めた問題で，文化史の学習を単語の暗記で済ませてしまう受験者に警鐘を鳴らす良問であると評価された。

問３　史料から読み取った情報と古代の政治・社会・文化に関する知識を活用して，古代の仏教と文化・政治の関わりについて考察する力を問うた誤文判断問題である。仏教の果たした役割を政治や社会との因果関係の中で正確に考察できるかが問われる問題であったと評価された。

問４⑴　史料が作成された背景に着目して，平安時代の中央と地方における政治・社会の動きを明らかにする力を問うた。正答率もやや低く，10世紀頃の律令制の実態を中央と地方の視点から問うた良問であるが，少し難しい問題でもあったと指摘された。

問４⑵　史料から読み取った情報と，平安時代の地方の政治や社会の問題との関わりを類推する力を問うことを狙いとし，平安時代の地方の情勢に関する２文の正誤を判断する問題である。10世紀頃の地方社会と醍醐朝の政策に関する標準的な問題であるとの評価を受けた。

第３問　「学習指導要領」日本史Ｂのうち，「武士の土地支配と公武関係，宋・元などとの関係，仏教の動向に着目して，中世国家の形成過程や社会の仕組み，文化の特色とその成立の背景について考察させる」との趣旨を中心に出題した。リード文Ａは，奥羽に強大な政治権力を有する平泉藤原氏をうつために，源頼朝が自ら大軍を率いて遠征し，源頼義の正統的後継者として自らの権威を確立し，主従関係も強化して，鎌倉幕府確立に大きく前進したことにかかわる政治・文化の理解を問うた。リード文Ｂは，南北朝内乱について概観し，その間の社会動向や人々の信仰について問うた。

問１　リード文を読んで，政治をめぐる歴史的事象を時系列的に捉える力を問うた。知識をきちんと問うこうした設問は今後も必要との意見を得た。

問２　史料を読んで，歴史的事象の推移や変化について問うた。

問３　平安末から鎌倉期の知識・理解を問うた。論理的な判断力を問う設問であるとの評価も得た。

問４　南北朝内乱期の社会動向について正しく把握しているかを問うた。法令や人物に関する正確な理解を要する設問との評価を得た。

問５　日本中世の生命・信仰にかかわる動向について問うた。関係性や論理的思考力を問う設問との評価を得た

第４問　「学習指導要領」２⑶ウのうち，「幕藩体制下の農業など諸産業や交通・技術の発展，町人文化の形成」や「学問・思想の動きに着目して，近世の都市や農山漁村における生活や文化の特色とその成立の背景，幕藩体制の変容と近代化の基盤の形成について考察させる」をふまえ，近世の政治・経済・社会・外交・文化全般に関する理解と，分析的・関連的思考力を問うことを狙いとした。また「学習指導要領」２⑶アの「歴史的事象には複数の歴史的解釈が成り立つことに気付かせ，それぞれの根拠や論理を踏まえて，筋道立てて考えを説明させる」をふまえ，宝暦～天明期に関する学習の場面を取り上げて，資料などを用いて，この時期の多面的な様相や，その相互の繋がりを考察させる問題とした。

問１　近世の主要な事件・出来事のうち田沼時代に該当するものを選択させる問題。それぞれの選択肢の内容を江戸時代の政治史や外交史の流れのなかに位置付けて考察できるかを問う

ている点で良問という評価をうけた。

問２　江戸幕府の支配の仕組みについての問題であるが，用語の内容理解と論理的思考力を求める良問と評価された。

問３　江戸時代の銅版画に関する絵図から読み取れる内容とその時代背景にある思想や学問の動きについて，正文の組合せを判断する問題。歴史用語の知識とともに絵画資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する分析的思考力を問う良問であった。

問４　『赤蝦夷風説考』の一部を読み取り，２文の正誤を判断する問題で，史料の読解力と，田沼時代に関する知識とあわせて「蝦夷」を取り巻く地域的な考察力を求めた。これは知識と読解の両方を求める良問であると評価された。

問５　松平定信『宇下人言』の一部を読み取り，内容と時代背景について，正文の組合せを判断する問題。史料の読解力と都市と農村を関連付けて考察し，商品経済の発展による社会構造の変化との因果関係を理解できているかを問う問題であった。

第５問　「学習指導要領」日本史Ｂの２内容「⑷近代日本の形成と世界」の「ア　明治維新と立憲体制の成立」にある「開国と幕府の滅亡，文明開化など欧米の文化・思想の影響や」「立憲体制の成立に着目して，明治維新以降の我が国の近代化の推進過程について考察させる」及び「ウ　近代産業の発展と近代文化」にある「近代産業の発展の経緯」「について考察させる」に則り，当該期に活躍した人物の年表を掲げ，幕末から明治にかけての政治・経済・外交に関する基本事項を問うことを意図している。幕末から明治にかけて活躍した人物の年表を掲げ，幕末から明治にかけての政治・経済・外交に関する基本事項を問うた。なお，本問は「日本史Ａ」第２問との共通問題である。

問１　幕末における対外関係の展開を時系列的にとらえることができるかを問う問題である。年代整序の形式をとった。

問２　近代日本の財政・金融制度の成立に関して，習得した知識を活用して，歴史的事象の推移や変化について考察することができるかを問う正文の組合せ問題。

問３　近代産業の導入・発展とその影響について，複数の歴史的事象を比較して共通性や差異をとらえることができるかを問う正誤の組合せ問題。産業と貿易を関連づけて理解できているかを問う良問という評価を受けた。

問４　大日本帝国憲法下の政治制度に関する知識・理解を問うとともに，近代史料の読解の技能を問う問題。

第６問　「学習指導要領」１「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ，我が国の伝統と文化の特色について認識を深めさせることによって歴史的思考力を培」う点に基づき，食生活，食文化といった身近なテーマに関する文章を通して，これに関連する近現代日本の基本的事項を問うことを狙いとしている。

問１　食に関わる経済・社会・文化の基礎的事実を問う問題である。多岐にわたる分野の理解を求めた問題という意見があった。

問２　食糧消費量のグラフから，第二次世界大戦以降の食生活の洋風化などの変化を問うた問題である。「資料を活用した問題は共通テストらしい」という評価があった。

問３　日本を含めた東アジアにおける人の移動について，基礎的事実を問うた。「歴史用語だけでなく，選択肢の記述をしっかりと読み込み考察できるかが問われる問題」，「年代配列問題に年号暗記で対応しようとする受験者への警告にもなる設問である」という評価を得た。

問４　都市と農村の生活について，歴史的事実の理解を問うた。「政府の経済政策が人々の生活に直結するものと関連付けて考察できるか，経済史の正確な理解が求められた」「明治期

から昭和戦前期の社会・経済史に関わる理解及び思考力・判断力が求められる」と評価がある一方，「解答は容易であっただろう」と指摘もあった。

問５　関税政策の立場の違いを通して，第一次大戦期の政治状況の理解を問うた。「関税を維持または廃止した場合の影響について考察し，支持の根拠となる理由と関連付けた思考力が求められた」，「日本史の学習で得た知識が現代の私たちの生活を理解する上でも役に立つことを受験者に教えてくれる設問でもあった」と評価された。

問６　戦時期の生活状況，特に食糧事情についての基礎的事実を問うた。「同時期の人々の生活の様相について社会的背景の中で思考力・判断力が求められる」と評価がある一方で「戦時下の食に関する設問で易しい」との指摘もあった。

問７　戦後復興期の日本社会と占領政策の動向についての基礎的事実を問うた。「用語の内容を理解できていた受験者には易しかったであろう」と指摘があったが，

３　出題に対する反響・意見等についての見解

教科書の内容に準拠しつつ，知識・理解，思考力・判断力・表現力等を発揮して解く問題が随所に見られたと評価された。また，学習過程を意識した場面設定を多く取り入れ，日常的な身近な事柄を題材とした点も，「生徒が主体的に取り組むきっかけになる」と高く評価された。教育研究団体からは，出題時代・分野の若干の偏りが指摘されつつも，時代・分野をまたぎ，俯瞰的な日本史学習の成果を問う設問が多いと評価された。「日本史教育に携わる人々や，来年度以降の受験者に対して，日本史学習のあり方についての一つの方向性」が提示されているとの評価を得た。

来年度も，これらの指摘を踏まえ，難易度や出題分野・時代のバランスに留意しながら，分かりやすい表現に努め良問を作ることを心がけたい。

４　ま　と　め

今年度の「日本史Ｂ」の平均点は，62.29点であり，標準的な問題を作成できたと判断している。来年度以降も，この方向で作題を進めたい。本部会は，問題作成上の留意点として以下の４点を挙げてきた。

- 高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく，平均点を上げるため，標準的な問題を作成するように一層心掛ける。
- 高校現場での授業に配慮する。
- 問題領域や設問形式のバランスや文字資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ，「歴史的思考力」を問う問題を多く出題するように工夫する。
- 「日本史Ａ・Ｂ」との共通問題の難易度について更に配慮する。

来年度も，センター試験や今年度の共通テストでの知見の蓄積を活用し，また今回ご指摘いただいたこともまえ，問題作成を行っていく。